従順と主のご栄光

2009. 3. 17 (火)

ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

使徒の働き 5章32節

「私たちはそのことの証人です。神がご自分に従う者たちにお与えになった聖霊もそのことの証人です。」

ローマ人への手紙 5章19節

すなわち、ちょうどひとりの人の不従順によって多くの人が罪人とされたのと同様に、ひとりの従順によって多くの人が義人とされるのです。

ピリピ人への手紙 2章8節

キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。

テサロニケ人への手紙・第二 1章8節

そのとき主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に報復されます。

過去において私たちはモーセの生活について、またダニエルとその三人の友だちの生活について一緒に考えてまいりました。彼らはなぜ祝福されたのか、つまり主に用いられる器となったのかと言いますと、「信じた」だけではなく、「従った」からなのでした。

今読んでいただきました四箇所を通し、信仰生活における「従順の大切さ」について書き記されています。「信じます」と言っても、「従わなければ」、この信仰は本物ではないと言わざるを得ません。

「従順」であるということがなぜそれほど大切であるかと言いますと、その結果としての「主のご栄光」を拝することが出来るからです。「栄光」という言葉は、聖書の中でよく出てきます。「栄光」とは、主のみわがが明らかになるという主のご臨在を現わします。そして主がご自身を啓示してくださるならば、人間である私たちは、「神のご栄光を見た」と告白するようになるのです。

例えば、次の箇所を見ても分かります。出エジプト記に書いてあります。「主はモーセに告げて仰せられた」と。けれど、それで終わりではありません。「モーセはそのようにした」。

「すべて主が彼に命じられたとおりに行なった」と記されています。分かった、分かった

ではありません。主が命令なされたので、彼は従ったのです。その結果は、
出エジプト記 40章34節

そのとき、雲は会見の天幕をおおい、主の栄光が幕屋に満ちた。

モーセでさえも入る余地がなかったのです。その時、主は「すべてのすべて」となりました。

このイスラエルの民の建てたいいわゆる「幕屋」に、どれほど主のご栄光が満ち満ちたかを見ることができます。ほかの箇所にも同様な事がらが見受けられます。「幕屋」は「荒野の旅」、その時だけに必要なことでした。けれども後に、ソロモンは立派な宮を建てました。

列王記・第一 8章11節

祭司たちは、その雲にさえぎられ、そこに立って仕えることができなかった。主の栄光が主の宮に満ちたからである。

即ち、主が中心になられたので、祭司たちでさえも仕える余地がなかったのです。「主のご栄光」が宮に満ちたのです。将来の神殿についても、同じようなことが書かれています。

将来の神殿について、エゼキエルは次のように書いたのです。

エゼキエル書 44章4節

彼は私を、北の門を通過して神殿の前に連れて行った。私が見ると、なんと、主の栄光が主の神殿に満ちていた。そこで、私はひれ伏した。

とあります。

イエス様の弟子たちも、「主のご栄光」を拝するようになったとあります。ヨハネ伝1章16節。よく引用される箇所です。

ヨハネの福音書 1章16節

私たちはみな、この方の満ち満ちた豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを受けたのである。

と証しすることができたのです。

初代教会の最初の殉教者であるステパノも、「主のご栄光を見た」、と記されています。彼は、かの心無い人々から迫害を受けたのです。迫害された時、彼に神のご栄光が現われ、「イエスが神の右に立っておられるのが見えた」と、ステパノは証したのです。

私たちについては、テサロニケ第一の手紙2章12節に次のように書かれています。

テサロニケ人への手紙・第一 2章12節

ご自身の御国と栄光とに召してくださる神にふさわしく歩むように勧めをし、慰めを与え、おごそかに命じました。

と。

即ち、私たちは主なる神によって御国とそこにご栄光とに召された者である、とパウロはテサロニケの兄弟姉妹に書き送ったのです。

どうして、なぜ、「主のご栄光」が幕屋に満ち満ちたのでしょうか。また、なぜ弟子たちは、「主のご栄光」を拝することができ、ステパノは主のご栄光を見ることができたのでしょうか。では私たちに対して、聖書は、「私たちを御国と栄光に召した」と語っていますが、いったい何を意味しているのでしょうか。この「ご栄光」とは、いったいどのようなものなのでしょうか。

・一つの答えは、ヘブル書1章3節ではないかと思います。

主イエス様はどのようなお方であるか、書かれています。

ヘブル人への手紙 1章3節

御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現われであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。また、罪のきよめを成し遂げて、すぐれて高い所の大能者の右の座に着かれました。

「御子は神の栄光の輝きである」とあります。私たちのイエス様は、本当に「父なる神のご栄光の輝き」そのものです。

・もう一箇所、ペテロ第一の手紙4章14節。

ここで、聖霊はどのような御霊であるか、ということが記されています。即ち、「栄光の御霊」であると。

ペテロの手紙・第一 4章14節

もしキリストの名のために非難を受けるなら、あなたがたは幸いです。なぜなら、栄光の御霊、すなわち神の御霊が、あなたがたの上にとどまってくださるからです。

この箇所によると、聖霊は、「栄光の御霊」と呼ばれています。このヘブル書1章3節と、ペテロ第一の手紙4章14節の二つのみことばは、私たちの疑問に答えるものではないでしょうか。即ち、私たちに現わされた主の尊い「ご臨在」こそ、主のご栄光です。

主は「神の栄光の輝き」として、天から私たちの住むこの地上においでになりました。弟子たちは、これを見て、「私たちは神のご栄光を見た」と証しすることができたのです。イエス様の上には、主なる神の聖い霊が限りなく注がれていました。どうしてでしょう。イエス様は、父のみこころに全くかなったお方だったからです。

イエス様が私たちのうちに、その御形（みかたち）を形造ってくださるその段階にしたがって、その度合いに応じて、私たちは主のご栄光を見ることができるようになりました。主を知ること、主をよりよく知ること、主のご栄光を拝することこそ、最も大切なのではないのでしょうか。

三つの点に分けて、一緒に考えてみたいと思います。

第一番目。主に従う重要さ。

第二番目。従順と不従順の結果。

第三番目。全き信仰の要求について、です。

*第一番目。「主に従う重要さ」について、一緒に考えたいと思います。

いったいなぜイエス様に従うことがそのように大切なのでしょう。イエス様はご自分の臨在を現わされたいのです。ご自分の栄光を明らかになさろうと望んでおられるからです。

父なる神のご栄光は、「従順」によって現われます。イエス様に従うと、「主のご栄光」を見ることができます。イエス様が語られるたびごとに私たちが従うなら、主のご臨在を経験することができます。主のご栄光を見ることができるのです。

日常生活において、主は私たちに「これはいけない。あれはいけない。こうすべきだ」とささやいてくださいます。このどんな「小さなささやき」にでも、私たちが「従順」に従うなら、主はご自身の栄光を現わしてください。この「栄光」は、私たちを、「主。我とともにいます」という確信に導き入れ、この確信は私たちを限りなく平安な深い喜びへと引き込みます。

イエス様に従順に従うなら、この主のご栄光、主のご臨在を、経験することができるのです。この事実を五つの実例から読み取ってみたいと思います。

- ① モーセ。
- ② イエス様の弟子たち。
- ③ マルタ。
- ④ アナニヤ。
- ⑤ ペテロ。

① まず、「モーセ」について。

モーセは、ひたすら主に従順でした。聖書を読んでいくと、「モーセは主が命じられたとおりにした」と何回も何回も記されています。出エジプト記40章を読むと、何節を見ても全くいつも繰り返し、繰り返し同じことが書いてあります。

出エジプト記 40章19節

幕屋の上に天幕を広げ、その上に天幕のおおいを掛けた。主がモーセに命じられたとおりにである。

モーセ自身の考えは大切ではなかったのです。

出エジプト記 40章21節

箱を幕屋の中に入れ、仕切りのために垂れ幕を掛け、あかしの箱の前を仕切った。

主がモーセに命じられたとおりである。

出エジプト記 40章23節

その上にパンを一行に並べて、主の前に供えた。主がモーセに命じられたとおりである。

出エジプト記 40章25節

そうして彼は主の前にもしび皿を上げた。主がモーセに命じられたとおりである。

出エジプト記 40章27節

その上でかおりの高い香をたいた。主がモーセに命じられたとおりである。

出エジプト記 40章29節

全焼のいけにえの祭壇を、会見の天幕である幕屋の入口に置き、その上に全焼のいけにえと穀物のささげ物とをささげた。主がモーセに命じられたとおりである。

出エジプト記 40章32節

会見の天幕にはいるとき、または、祭壇に近づくとき、彼らはずっと洗った。主がモーセに命じられたとおりである。

このような従順の結果は、34節に書いてあります。

出エジプト記 40章34節

そのとき、雲は会見の天幕をおおい、主の栄光が幕屋に満ちた。

モーセは主の思われたとおりに従いましたので、主のご臨在が明らかになることができ、主のご栄光が幕屋に満ちたとあります。

②「弟子たち」について。

弟子たちは、さまざまな敗北のうちから、またさまざまな経験を通して、私たちは「主のご栄光を見た」と証しすることができたのです。けれど、この弟子たちの場合にも、主に対する従順の結果、「主のご栄光を見た」ということを知らされます。即ち、私たちと同じように、あの弟子たちも、初めからすぐ主に従順に従ったわけではありませんでした。

ヨハネ伝 11章7節、8節を見ると分かります。ラザロの話ですが、

ヨハネの福音書 11章7節、8節

その後、イエスは、「もう一度ユダヤに行こう。」と弟子たちに言われた。弟子たちはイエスに言った。「先生。たった今ユダヤ人たちが、あなたを石打ちにしようとしていたのに、またそこにおいでになるのですか。」

イエス様が行こうと言われた時、「はい。行きます」と、そのような気持ちがなかったのです。「イエス様、危ないですよ。おやめになったほうが良いのではないですか」と。弟子たちのイエス様に対する態度がどのようであったか、この箇所を見ても分かるような気がします。それは、弟子たちが以前にユダヤで迫害されたことを思い出したのでしょうか。「イエス様、あの迫害をお忘れになったのでしょうか。行ったら、とんでもないことになりませう」。そのような気持ちを持っていたのです。つまり、尻込みしたわけです。けれど、弟子たちは最後に仕方がなくて、イエス様に従ってユダヤに行きました。

従った結果はどうだったのでしょうか。迫害ではなかったのです。そうではなく、主に従った結果、驚くばかりの「主のご栄光」を拝することができたのです。即ち、死人ラザロが死よりよみがえさせられた「奇跡」を、見ることができたのです。

③ ラザロの姉だったでしょう「マルタ」について、考えてみると分かります。

ヨハネの福音書 11章39節、40節

イエスは言われた。「その石を取りのけなさい。」死んだ人の姉妹マルタは言った。「主よ。もう臭くなっておりませう。四日になりますから。」イエスは彼女に言われた。「もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る、とわたしは言ったではありませんか。」

主は命令してくださいました。「墓の石を取り除けなさい」と。これに対して、マルタはすぐに従おうとしなかったのです。「主よ。もう臭くなっています。死んでから弟は四日もたっているのです。とんでもない。もう駄目です」と。けれど、最後にイエス様のみことばに従い、墓の石を取り除いた時、死人のラザロは生き返り、墓から出てきました。驚くべき主のご栄光を拝することができたのです。もし、不従順のため墓の石を取り除かないで、そのままにしていたなら、「主のご栄光」を決して見ることはなかったでしょう。

④「アナニヤ」という弟子について、使徒行伝9章に書かれています。

使徒の働き 9章10節、11節

さて、ダマスコにアナニヤという弟子がいた。主が彼に幻の中で、「アナニヤよ。」と言われたので、「主よ。ここにおります。」と答えた。すると主はこう言われた。「立って、『まっすぐ』という街路に行き、サウロというタルソ人をユダの家に尋ねなさい。そこで、彼は祈っています。」

「主よ。ここにおります。」と答えました。（なかなかいい答えですね。）

使徒の働き 9章13節、14節

しかし、アナニヤはこう答えた。「主よ。私は多くの人々から、この人がエルサレムで、あなたの聖徒たちにどんなにひどいことをしたかを聞きました。彼はここでも、

あなたの御名を呼ぶ者たちをみな捕縛する権限を、祭司長たちから授けられているのです。」

イエス様がアナニヤにお現われになり、「アナニヤよ。サウロのところへ行きなさい」とおっしゃいました。その時アナニヤは、すぐに主に従うことをしなかったのです。どう言ったかと言いますと、「主よ」と。（「主よ」と言ったのですが、本当はそう思わなかったのです。）「主よ。とんでもない話です。あなたが行けと言われるサウロは、私たちに迫害する指導者ではないですか。恐ろしくて行くことはできません」。けれどアナニヤも、最後には従ったのです。その時、やはり従った結果として、アナニヤは「主のご栄光」を拝することができたのです。もしあの時、アナニヤが最後まで主に従わなかったなら、サウロ、後のパウロはどうなっていたことでしょうか。あの偉大な使徒パウロは生まれなかったに違いありません。アナニヤがなぜ生まれたのか、どうして救われたのか、それは、おもにそのためだったのではないのでしょうか。そして、従った結果として、「行ったのは良かった！」と、彼は後で何度も思ったでしょう。

⑤ 「ペテロ」。

使徒行伝 10 章 13 節、14 節を見ると、彼の答えについて書かれています。

使徒の働き 10 章 13 節、14 節

「ペテロ。さあ、ほふって食べなさい。」という声が聞こえた。しかしペテロは言った。「主よ。それはできません。私はまだ一度も、きよくない物や汚れた物を食べたことはありません。」

主がペテロに、「これらのけものをほふって食べなさい」と言われた時、ペテロはやはり「嫌です」と、ただちに従おうとしなかったのです。「主よ。旧約聖書にきよくない物は食べてはいけないと書いてありませんか。とんでもない話です。食べるわけにはいきません」。

ペテロはその時、ユダヤ人と同じように異邦の民も主の祝福に預かることができるのだということを信じようとしなかったのです。けれど、最後にペテロは主に従い、異邦人であるコルネリオのところへ行った時、「主のご栄光」を目の当たりに拝することができたのです。即ちコルネリオ、及びその家族、また親族みな、そこに居合わせた者全部が救われただけでなく、聖霊に満たされたと書いてあります。

正しい結論は、「主に従いましょう。みことばに従いましょう」です。なぜなら、モーセや弟子たちやマルタやアナニヤやペテロのように、「主のご栄光」を見ることができ、更に「主のご臨在」を味わい知ることができるのですから。

* 第二番目。「従順」と「不従順」の結果について。

今まで、主に従う重要さについて考えたのですが、次に第二番目として、「従順」と「不従順」の結果について、考えたいと思います。私たちの「従順の結果」、また「不従順の結果」は、いったいどのようなものとなるのでしょうか。

私たちが従うか、従わないかの決定は、実に大切です、即ち、主のご栄光を拝するか、または主の備えられているご栄光を取り逃がしてしまうかのどちらかです。

もし、かのモーセが主に従わなかったなら、「主のご栄光」は幕屋に満ちなかったでしょう。もし、弟子たちが主に従ってユダヤに行かなかったなら、やはり「主のご栄光」、「主のご臨在」を拝することができなかったでしょう。また、アナニヤの従順が無かったなら、パウロはいったいどうなっていたのでしょうか。そして、ペテロが主に従っていなかったなら、ペテロ自身もコルネリオも決して「主のみ栄え」を拝することができなかったのです。

私たちの決定によって、私たちは「主の栄光」を見ることができますが、また「天の窓」を閉ざしてしまうこともできるのです。マルタのように、「主よ。ラザロが四日間墓の中において腐っているのをお忘れになったのですか」と言って、石を取り除けることをしなかったならどうでしょう。ラザロはよみがえらなかつたばかりでなく、「主のご栄光」を拝することもできなかつたでしょう。

もし、主が私たちに「あの兄弟、あの姉妹を訪問しなさい」と語られた時、「主よ。あの兄弟は意識して罪を犯し、あの姉妹は自分の仕事を偶像にしています。集会に来ていません。とんでもない話です。何をやっても駄目です」と言うなら、私たち自身の信仰の成長もないでしょうし、主のご栄光を拝することもできないでしょう。更に、離れているその兄弟姉妹も、やはり主の豊かな祝福とご栄光を体験することができないでしょう。

私たちはいずれの道を選ぶのでしょうか。主のささやきに対して不従順で、主のご栄光を拝する道を自ら閉ざしているのでしょうか。または、日々主に従い、「従順」をもって「主のご栄光」を拝しているのでしょうか。

***第三番目。全き信仰の要求。**

即ち、「主のご栄光」を拝するには「全き信仰」が必要であるということについて、最後に考えてみたいと思います。

イエス様はマルタに、「もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る、とわたしは言ったではありませんか」と言われました。ここでは、「従うなら」と言われていないのです。「もし信じるなら」と言われています。けれど「従順と信仰」は、ほとんど同じです。

へブル書の二つの箇所を見、調べてみるとよく分かります。へブル書3章になります。へブル人への手紙 3章19節

それゆえ、彼らが安息にはいれなかつたのは、不信仰のためであったことがわかります。

「彼ら」は、イスラエルの民です。「不信仰」は最も恐ろしい罪です。どうして彼らは四十年間荒野で迷ったのか、「不信仰」だったからです。次の章の4章6節。

ヘブル人への手紙 4章6節

こういうわけで、その安息にはいる人々がまだ残っており、前に福音を説き聞かされた人々は、不従順のゆえにはいれなかったのですから、

と書かれています。

3章19節に「不信仰」と書いてあります。4章6節に「不従順のゆえ」と書いてあります。イスラエルの民がエジプトの国から救い出されて四十年間荒野で迷ったのは、不信仰と不従順のゆえであった、とここに書かれています。原語では、この不信仰と不従順は同じことばです。主がエジプトの国から実り多いカナンカナンの国へ導き入れてくださるといふ「約束」に、イスラエルの民は「不信仰」のゆえに従わなかったのです。即ち、不従順のその根が不信仰です。

モーセは、いったいどうして主のご栄光を拝することができたのでしょうか。それは主がモーセに示されたその通りに幕屋を造ったからです。

マルタは、なぜ主のご栄光を拝することができたのでしょうか。彼女は信じて従い、墓の石を取り除けさせたからです。もし、あの墓の石を取り除かなかつたら、死に打ち勝つ主のよみがえりの御力は現わされなかつたでしょう。

前にあげた人々は、主に従いたくなくて従わなかつたのではありません。

- ・ユダヤへ行って、ご栄光を拝した弟子たちは、以前、あれほど迫害されたユダヤへなぜ再び主は行かれないのか、理解できなかつたからでした。
- ・また、腐って、臭いのする、四日間も墓の中に入っている死人がよみがえるなどということは、マルタにとって到底理解できないことだからでした。
- ・また、あのアナニヤは、荒れ狂ってイエス様を信じる者を迫害しているサウロが、祈りの人、イエス様の御名を呼び求める人になるとは、夢にも思っていなかつたのです。
- ・また、ペテロは、「汚れたものを食べなさい」という主のお言葉を理解することができなかつたのです。理解できない、考えられない、想像することもできないということは、やはり不信仰のゆえですが、この不信仰は不従順となるに及んでその頂点に達します。その結果は、天の窓が閉ざされ、主のご栄光を拝することができなくなるのです。

しかし、モーセ、弟子たち、アナニヤ、ペテロは、おのおの「主の御栄え」を拝するようになりました。どうしてでしょうか。彼らはお言葉に従順に従つたからです。ソロモン大王は次のように書いたのです。箴言3章5節です。非常に大切な素晴らしいことばです。

箴言 3章5節

心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りにたよるな。

「理性」とは、概念をつくる能力、結論を引き出す能力、判断を下す能力であり、しかもそれこそまさに人間に与えられている素晴らしいものです。けれど、それにもかかわらず、人間は何と多くの見当違いや、計算違い、或いは意味のないことをして頭を抱え込むのでしょう。この理由から、主は私たちに対しても、「心を尽くして主に抛り頼め。自分の悟りにたよるな」と、提案しておられるのではなく、命令しておられるのです。

「信仰」とは、「主に対する絶対的な信頼」です。これに対して、人間の理性は、自分のからだやいのちを心配しますが、その結果は不信仰に終わります。信仰とは、全知全能なる主のすべてを「確信する」ことです。これに対して、人間の理性は主の全知全能なることを疑います。これもまた不信仰の現われです。信仰とは、目に見えないお方を見ます。これに対して人間の理性は、心配そうに目に見えるものを見るのです。これもまた不信仰の現われにほかなりません。

それゆえ、イエス様を信じるということは、徹頭徹尾自らを主に委ねることです。全部イエス様に明け渡すことです。「信仰」とは、「主のみことばに対して、全く従順である」ことを意味します。「心を尽くして主に抛り頼め。自分の悟りにたよるな」。

理解することができず、馬鹿らしく見え、不可能に見えても、主のささやかれる御声に従いましょう。そうすると「主のご栄光を拝する」ことができます。不可能に見えたことが現実に可能となります。

エレミヤ書の32章から、2、3節最後にお読みいたします。

エレミヤ書 32章6節から9節

そのとき、エレミヤは言った。「私に次のような主のことばがあった。見よ。あなたのおじシャルムの子ハナムエルが、あなたのところに来て、『アナトテにある私の畑を買ってくれ。あなたには買い戻す権利があるのだから。』と言おう。すると、主のことばのとおり、おじの子ハナムエルが私のところ、監視の庭に来て、私に言った。『どうか、ベニヤミンの地のアナトテにある私の畑を買ってください。あなたには所有権もあり、買い戻す権利もありますから、あなたが買い取ってください。』私は、それが主のことばであると知った。そこで私は、おじの子ハナムエルから、アナトテにある畑を買い取り、彼に銀十七シエケルを払った。」

主が預言者エレミヤに、アナトテにある畑を買いなさいと言われた時、エレミヤは、「とんでもない。アナトテは恐るべき敵の住んでいるカルデヤ人の地ではないですか。無駄なことでしょう。金を出しても自分のものにならないのではないですか。敵のものとなった土地のために金を払うのは、人間的に考えればおかしい。馬鹿らしいです」という態度はとらなかったのです。そして、エレミヤはアナトテの畑を買いました。なぜなら、主は、この土地は近いうちにまたイスラエルのものとなると約束してくださったからです。

本当に覚えるべきことは、「信仰生活における従順」の結果は驚くべき豊かな主の祝福にあずかる、とすることです。私たちは、自分の考えに従うことなく、ただ、みことばに直ちに従っていく信仰生活をしたいものです。

エレミヤ書 32章17節

「ああ、神、主よ。まことに、あなたは大きな力と、伸ばした御腕とをもって天と地を造られました。あなたには何一つできないことはありません。」

エレミヤ書 32章27節

「見よ。わたしは、すべての肉なる者の神、主である。わたしにとってできないことが一つでもあろうか。」

私たちのイエス様にとって不可能なことは何一つありません。「行って、アナトテにある畑を買いなさい」。主のみことばを信じ、主に不可能なことがないことを信じ、従順に従うなら、間違いなく、驚くべき「主のご栄光」を拝することができるのです。

主がみことばをもって私たちに語ってくださったら、どんなに不可能に見えてもすべてを成してくださる主の御力を信じ、目に見えないことでも、不可能なことでも実行しましょう。その時、主の豊かなご栄光と祝福を経験することができるに違いありません。

了